

学生生活

・ 支援内容・組織構成

メインストリームの学生が、キャンパスの中でどのように生活していくのか、そしてその時に起こりうることに對して取り組んでいっているのか。このプログラムは、メインストリームの学生だけではなく、NTID に所属している聾学生にとっても大切なことである。

学生生活支援として、1つは、主にドミトリーにおいての学生生活である。メインストリームのドミトリー聾の学生が60%で、残りが健聴学生40%である。その活動は、ミーティングをおこなったりする。活動には3つある。ひとつは、活動である。2つ目は、学生生活規則の活動、そして3つ目は、ドミトリーにいる学生の支援である。主に集中して行っているのは、キャンパスにおける聾学生と難聴学生を対象に行っている。アウトリーチプログラムなどもある。リーダーシップなどを育成することに携わっている。

また女性を対象にした活動で、たとえば女性に対するセクシャルハラスメントなどである。教育のディスカッションは、Making Difference である。違いを明らかにするということである。この活動は、学生がクラスのなかだけではなく、学外でも多くの利益の支援を受けられるようにする活動である。

私たちの組織は、NTID の組織とは異なる。この組織は教育関係の人たちも携わっているし、学生と分けている。RIT のサービスとまた異なるが、RIT とも協力してサービスをしている。

支援形式としては、質問に對して答える。何がメインストリームの学生に必要とされるのか。これに對して答える。

・ 学生の問題

聾の学生に必要とされるものは、健聴学生とまったく同じものである。多少の違いはある。聾学生にとっては、よりチャレンジすることもある。このキャンパスでは、いろいろなコミュニケーションを使っている。たとえば手話、ASL (アメリカ手話) を使い、声は使わない人、ASL (アメリカ手話) をまったく知らない人、そして聾者でも手話を知らない人がおり、このためコミュニケーションの多様性がチャレンジとなっている部分がある。それが一つの問題である。健聴学生と類似した問題もあるというのを話すならば、どのように学校生活になれてくるのかである。これまで家から学校にかよっていたが、家での生活とドミトリーの生活がどのようにかわっていくのか、それは、健聴学生と類似した問題であると言える。高校時代には、両親がいろいろやってくれているので、自分では、何かをしなければならぬということはないが、大学に入ること、自分で何事もやって

いかなければならないため、そこで問題が発生する。

学生には、いつ課題をやっていいのかなどという人はいない。学生の中には、いつホームワークをやっていいのかわからない人もいる。時間をどのように使ったらよいかかわからない学生もあり、私たちの助けが必要な学生もいる。

その他交友関係をどう作っていったらいいのか、ルームメイトとどのように関係をもつていったらいいのか、同じフロアにすんでいる人たちとどのようにいい関係を作ったらいいいのか、チームワークをどのように保っていったらいいのかなどである。こうしたことに関して支援が必要な学生もいる。

学生の中には何を食べてらいいのか。何を作ったらよいかかわかっているが、中には1週間ずっと、ハンバーガーやフライドポテトを食べたりして、いやになっている学生もいる。こうした問題は、聾学生でも健聴学生でも両方に起こる問題である。聾に関していえば、どのように他の学生と交友関係を保っていくのか、コミュニケーションをどのようにとっていくのが問題となる。私たちが直面している最大の課題は、聾学生の中には殻に閉じこもっている学生もいる。高等時代も通訳者を通してしてコミュニケーションしてこなかった。他人とのコミュニケーションがないため自分を殻にとじこめている。それが私たちの課題になっている。聾学生の中にはずっと両親やアドボケータ、アドバイザー、カウンセラーなどが自分のために主張してくれていた人たちがいたが、大学にきて一人なので、孤独感を感じてしまう者がいるのも事実である。大学生活では、自分自身が聾であることを主張していかなければならなし、自分の権限を主張していかなければならないことは学生にとってチャレンジである。

ドミトリーでは学生のスタッフも雇用している。その中には聾学生もいる。もしも、ミティングを行う場合には、コミュニケーションの面で少し時間がかかったりする。スタッフは、全員手話ができるが、聾に話している時と健聴の人と話をするときとは、伝え方がちょっと違う。このあたりで明確に伝えるという意味で、時間がかかってしまう。学生の個人個人にあった必要性を見いだしていくのも大切なことである。なぜなら、学生それぞれが育ってきた環境は異なり、それぞれにあったやり方がある。それに合ったやり方が大切である。

私たちがかかえる問題は、学生のドミトリーのルールや行動をとる学生が中にはいる。これはアメリカだけではなく、国際的な問題である。ただアメリカとは異なるのではと思う。目的は、平穏な生活ができることである。学生を卒業した後、職業にも役立つようなことを寮生活で身につけていってほしいと願っている。例として学生生活プログラムがある。幾人かの聾学生の中には、かつて聾学校にいた人と一緒になり、そうした人たちとは友人関係ができていく。そうしたことがより友人関係を作ろうと積極的になる。友人関係を支援するためにこうした部門がある。プログラムのコーディネータは、うまくいっている。学生生活でもわるい面もある。

学生の中には、孤立した中で育ってきている。聾者にとって大切な情報、有益な情報 2

を失ってきている。健聴者であったならいろいろな情報を得てきているのに、情報を得ていないと言うことである。たとえば聾学生が健聴学生と交友関係をもっていれば、得られる情報が多くあると思われるが、それをなくしてしまってきているのが問題となることである。私たちが望んでいるのは、聾学生だけの交流ではなく、多くの聾学生や健聴学生と友人関係などをもっていくことである。そして学生たちが、いままで逃してきた情報を得てもらいたいと望んでいる。そして私たちが学生たちをコントロールし、学生生活がうまくいき、成績もわるくならないようにするのが仕事である。

．ドミトリーについて

12階あり、半分に区切っている。その内のいくつかを健聴学生のためのもので、いくつかの階は聾学生だけのためである。いくつかのフロアは聾者の学生だけであったり、いくつかのフロアは健聴学生だけだったりする。あるいは聾学生、健聴学生と一緒に住んでいるフロアもある。聾学生と健聴学生とを分けているのは、学生の生活の心地よさというのがある。聾学生の中には、聾者だけいっしょに生活したいというのがある。またいままで育ってきた環境、つまり健聴者のメインストリームの中で育ってきている人もいる。このため分けている。聾学生には、聾学生のルームメイトがいる。健聴学生には健聴学生のルームメイトがいる。ここでどうして聾学生に聾学生のルームメイトを与えるのか。健聴学生に健聴学生のルームメイトを与えるのかというについて話す。

何年前、聾学生と健聴学生と一緒にしていた。というのは差別をしないためである。その後、学生たちからフィードバックがあったが、お互いに嫌いだったというものがあった。聾学生と聾学生とでもお互いに問題があった。つまり、うまくいかなかったケースが多かった。今は、リクエストがなければ聾学生は聾学生とルームメイトとする。しかし希望すれば聾学生は、健聴学生と一緒にルームメイトをもつことができるし、健聴学生が聾学生のルームメイトをもつこともできる。これは、とりわけ NTID にきて、新入学生に見受けられるものである。家族から離れてしまって、コミュニケーションに関する問題をもってしまうことはチャレンジとなってしまうことなので、できるだけ避けようとしている。もし少人数の聾学生に関して、マネージメントをしているのであればこうしたことは考えない。おそらく聾学生の少ない他の大学であったなら、同じようなことはしない。振り分けなどしない。

．スタッフについて

スタッフは、27人で、そのうち60%が聾で、40%が健聴である。スタッフのうち17人が聾スタッフで10人が健聴スタッフである。学生とスタッフの担当比率は次のようである。学生を担当するスタッフの比率は次のようになる。

Hearing	学生	スタッフ
	34	: 1

DEAF 学生 スタッフ
 24 : 1

・マッチアッププログラムとロールモデルプログラム

ひとつは、学生同士をマッチさせることである。自分と同じ環境で育った環境、自分が尊敬できたり、真似たり、比較できたりする人で学びとることができるような学生をマッチさせることである。これによってリーダーシップを期待する。

その他に同じような環境の学生を捜し出し、そして他のデパートで必要があれば、そうした学生たちを紹介し、訪ねてきた人たちの必要性に応じられるようなマッチアップを作りだしていくことである。

学生どうしのマッチアップがなぜ大切なのか。同じ環境で育ってきた学生と一緒にさせることはすごく大事なことである。それはよい結果を得るものとなっている。たとえば、スペイン系の聾の学生がいる。この場合、私たちが促してスペイン系の学生どうしと一緒にする。新入学生は、交流関係を築くのが難しい。こういう同じバックグラウンドで育ってきた人たちを、私たちが仲介して一緒にさせる。これによって、新しく入ってきたときにスムーズは、コミュニケーションができる交友関係ができるようになる。こうした支援である。

プログラムの関係、お互いにどのようにサポートしながらサービスをしていっているのかを話す。

大切なことは、それぞれの学生をそれぞれのデパートにおいやってしまうのではなく、お互いに違ったサービスを与えていくこと、お互いに協力しあってサービスを与えていくこと、これは大切なことである。独立してサービスをおこなってしまうと、私たちはその分野のスペシャリストになってしまう。必要としていない学生たちは、私たちのところにこない。お互いに協力してやっていたら、お互いに何をやっているのかがわかる、必要であれば学生をあっちの部門からこっちの部門に移動させ、サービスをすることが可能である。

たとえばキャンパスの中に女性センターがある。この女性センターで新しいディレクターを探している場合がある。この場合、女性センターで働いている人たちだけでさぐのではなく、他の部署でも探してもらえるように互いに協力関係が成り立っている。他の人の時間を使って、ディレクターをさがしてもらうことは、大変恐縮だが、ディレクターを探すとなれば、やはり、新しくディレクターとなる人は、聾者に関して直面する知識がなければならぬ。聾に関する適切な人を捜すためには、聾を理解している協力関係が必要である。適切な人材を選ぶには、聾に関係しているサービスをおこなっている協力関係が大切である。

どのようにドミトリーで生活をしているのか。私たちのところでは、RIT で契約しているホテルで生活しているひともある。特別な家であるインターナショナルハウスと呼ばれ

ている家があり、その他にもグループが滞在できるような家も提供している。その他にもキャンパス内のアパート、キャンパス外のアパートがある。スタッフメンバは、寮に滞在し、できるだけ学生を監視できるようにする。多くの監視が必要である。スタッフはキャンパス内にあるアパートにも住んでいる。そして、監視をおこなっている。キャンパス外に住んでいる学生の場合は、監視をしない。

Q：スペシャルハウスとかインターナショナルハウスは、どのようなハウスなのか。そして RIT インというホテルはどのようなものか。

A：たとえばスペシャルハウスというものは、同じ興味のある、同じ学部の人たちが集まって生活しているハウスである。たとえばコンピュータ関係であれば、同じ学部に所属している学生たちが借りて生活できるような場所であり、家である。またエンジニアを専攻している学生たちが一緒に止まれるような家である。これがスペシャルハウスと呼ばれるものである。

RIT インは、RIT が実際に与えているもので、ホテルとまったく同じものであり、一部屋に2人で学生が生活する。ホテルは、学校から3マイルくらい離れている。アパートが足りないとか、部屋が小さいから理由でホテルに滞在したいという学生もいるし、ただ RIT インに希望する学生がいる。RIT インは大きな部屋であり、プールもある。このため好んで RIT インに滞在する学生がいる。RIT には 15,000 人の学生が生活しており、キャンパス内のアパートとドミトリーでは足りないのが現状である。このため、かつて学生は、キャンパス外でアパートを借りることをしなかった。数年前にある男性が私たちにホテルを寄付してくれた。今ではホテルをコンファレンスに使ったり、学生の宿泊する設備になったりしている。したがって RIT インは、学生の生活場所のオプショとなっている。

Q：聾の学生がここに入る場合に、ドミトリーで生活することをすすめているのか。

A：ドミトリーで生活するのは、必然的なものとなっている。1年生の場合は、10 マイル以内で生活している人たちは、ドミトリーで生活する必要はない。しかし 10 マイル以上離れたところに住んでいる人は、ドミトリーで生活しなければならない。ドミトリーで生活することを強制している理由は、1年生から寮生活を学ぶことができ、学ぶことによって卒業につながると信じて、こうした措置を進めている。

Q：寮生活での問題点は何か。ワースト3は何か。

A：ワースト1は麻薬や薬、アルコールである。

次は、ハラスメント、たとえば悪質メールを送ったり、いじめたりすることである。たとえば仲間の学習の邪魔をしたりする。3つ目は、鬱になってしまうこと。それによってクラスにいかなくなってしまう。自信をなくしてしまう学生もいる。成功する気力

を無くしてしまったりするのも問題である。そのような学生の兆候が現れたら、すぐ学生に働きかけるようにしている。もし学生のそのような兆候が何回かみかけられたら、私たちに報告するようになっている。そしてカウンセラーが電話をかけ、出向き、学生をカウンセリングするようになっている。

Q：聾学生と健聴学生との間でトラブルが起きたとき、健聴学生に対して障害の理解に対する理解を行っているのか。

A：今では、依頼がない限り聾学生と健聴学生と一緒にしないようにしている。フロアによっては、聾の二人のルームメイトが住んでおり、隣に健聴学生が住んでいるということもあり得る。もしそのような時があれば、オリエンテーションでビデオを見せて、どのように聾学生と健聴学生の生活が違うのか、ドミトリーの生活が違うのかをビデオを通して知らせている。それは2つの世界というビデオである。

ビデオでは聾学生と健聴学生が、大勢いる学生生活をどのように送っているのかを見せている。ビデオの中で、ある女子学生が「はじめてこの RIT に来たときに、最初に先生をみていないで通訳をみていた」という話も盛り込まれている。もちろん健聴学生の中には RIT にきてはじめて聾や手話に興味をもって、そこから手話を習いはじめる人たちもいるし、そのまま興味をもたないま生活をしている学生もいる。聾者と健聴者のお互いの文化や学生生活の違いを知るオリエンテーションは、学生たちは必ず行われる。

Q：オリエンテーションは、いつ行われるのか。

A：実際のクラスがはじまる1週間前に強制的にオリエンテーションを行っている。「2つの世界」というビデオを見せたり、学生どうしが住んでいるフロアでミーティングを行ったりする。新入学生がとらなければならないコースの中で、聾者の紹介をおこなったり、学生生活、聾文化を知らせている。その他、毎週水曜日に聾学生が健聴学生に手話を教えるなどの活動をしている。それは、学校の単位にはならない。聾学生にはトレーニングを行い、それに対してお金を払っている、手話を教える聾にとっては、リーダシップの育成によいものとなっている。また健聴学生にとっても聾者を理解できることでよい経験となっている。

Q：オリエンテーションは、聾学生も健聴学生も強制のプログラムであるのか。

A：強制的なオリエンテーションは、9月の入学の時期におこなっているが、冬学期、春学期に入ってくる学生については、人数がすくないため、このようなオリエンテーションは行っていない。

Q：聾が手話を教えるプログラムは、大学が用意しているものなのか。

A：学校では用意していない。クラブ活動のようなものであるが、教えることに対してのお金は大学側が払う。

Q：手話の教え方をクラブで教えるのか。聾者が手話を健聴学生に教えるのか。

A：私たちが教師がわりになる学生に対しては、トレーニングを行う。そしてトレーニングを受けた聾者は、手話を教える。聾者文化についても手話をおしえる中で教えている。

．最後に

聾文化をオリエンテーションの中に盛り込むことができたのは、すごくうれしく思っている。しかしここに至るまでは大変なことであった。学校でも聾文化を教えることをオリエンテーションで行いたいと思ったら、時間がすごくかかることをお伝えしておきたい。時間がかかるが、ビジョンを無くさないでほしい。大切なことは、他の学校と強い関係をもっていることで、聾文化とか聾者を全面に出せる学校となると思われる。35年間かかって、やっとこうしたことまでたどり着いた。まだ満足はしていない。しかし私たちはやってく。私たちは違いを作っていくことが重要だ。

今年の卒業式には、一人講演を行う学生がいる。その学生は、聾学生であり、今回はじめてである。35年かかっており、みなさんは、あきらめずにやることである。

聾関係における学校間の関係作りは、成功するためには非常に大切である。ビジネスサポートは、ビジネスでよい関係をもっていたことで、あのようなすばらしいサービスができてきた。先ほどもカウンセラーについて話を聞いたが、別の部門で働いているカウンセラーと良い協力関係や友好関係をもっていることで成功につながっていることがわかる。職業指導に関しても、そこで働いているスタッフたち、外との関係を保っていることがあのようなすばらしいサービスを提供することにつながっていると思っている。メインストリームにおいて聾者の人たちが成功するにあたっては、さまざまところでの交友関係というものが大切となる。簡単な、誰でも気づくことであるが、時にだれもがあしらってしまって、軽くみてしまう。